琉球大学学術リポジトリ

大学生の遅刻頻度とセルフ・コントロールとの関連 性

メタデータ	言語:
	出版者: 琉球大学教育学部
	公開日: 2015-12-16
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 金城, 志麻, 富元, 春華, Kinjyou, Shima, Kinjou,
	Shima, Tomimoto, Haruka
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/32925

大学生の遅刻頻度とセルフ・コントロールとの関連性

Relationship between Tardy and Self-Control of the university student

金城志麻*1 富元春華*2

Shima KINJYOU*1 Haruka TOMIMOTO*2

問題と目的

時間を守ることは、私たちが日常生活をおくる 上で求められていることであり、学校現場におい ては遅刻指導が行われ、重要視されている。しか しながら、中学、高校とすすむにつれて遅刻が目 立ち、大学においては日常茶飯事となっている(上 田・伊谷・杉村、1983)。

遅刻に関する先行研究において、遅刻日数は長期欠席の予測に有効である(命婦・岩田・向笠・ 津田、2012)が、遅刻が心理学的に問題として 扱われることは少ない。そのため、遅刻について さらに研究し、遅刻の改善につながる研究をする 必要性があるものと考える。

これまで、先行研究において遅刻を定義してい るものはあまりみられず、一般的な「きまった 時刻におくれること」(広辞苑) として扱われて いるものが多い。そのなかで、川上(2007)は、 期限付き課題遂行時に認められる遅れを遅刻と している。これに近いものに、先延ばしがある。 先延ばしの定義は「主観的な不安や不快感を経 験する時点まで、不必要に課題を遅らせる傾向」 (Solomon &Rothblum, 1984) というように意 識的な行動のみを先延ばしとしているものが多く あるが、意識的な行動も非意識的な行動も含めて 先延ばしとするものも存在する (小浜, 2010)。 大学生を対象とした先延ばし研究では、先延ばさ れる行動として学業課題を想定したものがほとん どであるが、そのなかで藤田 (2005) は、学業 課題以外の先延ばしについても想定し. 「課題先 延ばし」の他に「約束への遅延」をあげている。「約 束への遅延」には「約束やミーティングの時間に

女子大学生の遅刻に関する研究において、金 子・小幕 (2005) は、授業遅刻の理由として「寝 坊」「先生が遅刻に厳しくない」「授業がつまらな い」「時間の逆算が甘い」などをあげている。こ れらの理由で遅刻をする場合は情動や認知の制 御、あるいは望ましい行動にするための方略が上 手くいっていないと捉えられる。「授業がつまら ないから遅れても良い」等といった情動や認知を 制御し、遅刻しないという望ましい行動をするた めには自分自身を制御・統制し、その通りに行動 するセルフ・コントロール力が必要であろう。セ ルフ・コントロールとは、「直接的な外的強制力 がない場面で、自発的に自己の行動を統制する こと」(Thoresen & Mahoney, 1974) である。 Rosenbaum (1989) はセルフ・コントロールを Redressive (調整) と Reformative (改良) なも のに分けて考えることを提唱しており、改良型セ ルフ・コントロールを「習慣的な行動を新しくし てより望ましい行動へと変容していくためのセル フ・コントロール」調整型セルフ・コントロール を「ストレス場面において発生する情動的・認知 的反応の制御」、としている。それをうけて、杉 若(1995)は、セルフ・コントロールを二元的 に評価することでセルフ・コントロールの個人差 を評価するべきであるとし、日常的なセルフ・コ ントロールの個人差を評定する尺度(Redressive - Reformative Self-Control Scale: RRS) を作成 している。また、この尺度では、2種類のセルフ・ コントロールに加えて、行動のコントロールでは あるが、セルフ・コントロールには含まれず、他

よく遅れる」「授業は時間通り行く」ということが含まれるため、遅刻も先延ばしの一部であると捉えられる。これらのことを踏まえ、本研究では、「到着しなければならない時刻に遅れる」ことを遅刻の操作的定義とする。

^{*1} 琉球大学教育学部

^{*2} 沖縄県中央児童相談所

者依存の傾向や自発的な行動に対する消極性を含む行動のコントロールを「外的要因によるコントロール」としている。藤田 (2012) は先延ばしのうち課題先延ばしとセルフ・コントロールの関連を検討した結果、改良型セルフ・コントロールが課題先延ばし行動の抑制に影響していることを明らかにした。このことから、先延ばしの一部である遅刻にもセルフ・コントロールが関係していると考えられる。

セルフ・コントロールのような自己変革のために必要な認知的行動レパートリーは、一般に人の一生を通してかなり安定して一貫したものと言われている(Rosenbaum、1989)。これをうけ、上述した若杉(1995)の研究では、2種類のセルフ・コントロール(調整:D、改良:F)尺度得点の高低(H、L)によって分類した4群において面接を行い、各群に特異なセルフ・コントロールの行動傾向があることを明らかにした。また、杉若(1995)の研究においてセルフ・コントロールの4群のいずれの群間にも外的要因によるコントロールの有意な差は認められなかった。

これは中学・高校・大学と学校段階別の遅刻指導を考えると、学年がすすむにつれて、"遅刻指導がある"、"遅刻しないために親に起こされる"といった外的な要因が弱まっていくためと考えられる。つまり、大学になると遅刻するか否かが個人のセルフ・コントロールに委ねられる状況に変化していくと考えられる。以上のように、各学校段階における外的要因とセルフ・コントロールに関連がある可能性が考えられる。各学校段階において外的要因とセルフ・コントロールに関連があるならば、外的要因によって遅刻を防げている生徒に対して、セルフ・コントロールを高める事で、学校段階が上がった際の遅刻・不登校への予防的示唆が示されるだろう。

先延ばし研究において、先延ばし傾向は不安や抑うつなどの否定的感情と関連することが明らかにされている(Solomon &Rothblum, 1984; Lay, 1995)。このことから、遅刻と否定的感情にも関連があると考えられる。

日常体験するさまざまなストレッサーに よって引き起こされる情動的、認知的、行動 的変化を、ストレス反応という (Lazarus & Folkman,1984)。ストレス反応には、ストレッ サーが加わった直後に現れる一次的反応,ストレ ス状況がある程度長期化すると現れる二次的反応 がある。一時的反応は、不安感、怒り、イライラ、 悲しみ、落ち込みなどであり、二次的反応は、無 気力, うつ気分である(鈴木, 2004)。このこと から、遅刻する人の中でも、調整型コントロール が低い群は、日常生活で体験する様々なストレス から一時的反応(不安感, 怒り, イライラ, 悲しみ, 落ち込みなど)を感じ、気分・感情の切り替えの 苦手さから、このような否定的感情が長期化して、 二次的反応である無気力や,抑うつの状態になり やすいことが考えられる。また、否定的感情の出 現によって、適切にセルフ・コントロールする力 を鈍らせてしまうこともありうるだろう。さらに、 不登校忠者のストレス反応として不安・緊張・抑 うつなどが顕著にみられることが報告されている (野添・占賀、1990) ことから、不登校につなが ると考えられる遅刻は、ストレスを感じている 状態においてはセルフ・コントロールの個人差に よって遅刻頻度に違いがあると考えられる。

以上のように、セルフ・コントロール(中でも 調整型セルフ・コントロール)が低い群の人は、 ストレスを感じることが遅刻を引き起こす可能性 や、否定的感情が適切なセルフ・コントロールを 妨げてしまう可能性が考えられる。このことから、 遅刻を防ぐためには、セルフ・コントロールとストレスに焦点をあてた検討が必要である。

以上のことから、本研究では、遅刻頻度とセルフ・コントロール、心理的ストレスとの関連について検討することを目的とする。以上の内容を検討することは、遅刻を引き起こす要因を明らかにし、長期欠席への予防的支援につながる示唆が得られると考えられる。

方法

1. 調査対象者

調査は、A 大学に通う大学生 489 名を対象に行った。このうち、記入漏れや欠損値のあった者を除く 389 名(男性 166 名、女性 223 名、平均年齢 19.93 歳、標準偏差 1.54)を分析対象者とした。

2. 調査期間

2014年12月9日~12月25日に質問紙調査を行った。

3. 材料

使用した質問紙はフェイスシート, Redressive-Reformative Self-Control Scale, POMS 短縮版,大学生用ストレッサー尺度,主観的遅れ頻度尺度,一週間の授業の出席状況を記入するシート,大学生活での授業遅刻の有無と遅刻理由について記入するシートから構成されていた。また,遅刻についての回答をする際には,「授業の始業ベルが鳴り終わるまでに教室に入ることができなかったこと」を遅刻として回答するよう求めた。

(1) フェイスシート

性別, 年齢, 所属学部, 学年, 出身県, 居住 形態の記入を求めた。

(2) セルフ・コントロール

Redressive-Reformative Self-Control Scale (RRS:杉若, 1995)を用いた(6件法)。この尺度は、日常的なセルフ・コントロール方略の個人差を評価するために開発された尺度である。「改良型セルフ・コントロール」「朝整型セルフ・コントロール」「外的要因によるコントロール」の3つの下位尺度から構成されている。

今回の調査では大学生の時点でのセルフ・コントロールのみの測定ではあるが、セルフ・コントロールのような自己変革のために必要な認知的行動レパートリーは、一般に人の一生を通してかなり安定して一貫したものと言われている(Rosenbaum、1989)ため、高校生の時点のセルフ・コントロールと変化がないものであると捉える。

(3) ストレス

大学生用ストレッサー尺度 (Stressor Scale for College Student: SSCS) を用いた。菊島 (2002) が、児童青年期を対象としたストレッサー尺度 (Yeaworth et al., 1980; Elias, Gara&Ubriaco, 1985; 三川, 1988; 堂野, 1990;森岡他, 1991; 長根, 1991; 岡安他, 1992; 朝倉, 1993) を参考に、大学生用に作成した尺度である。それぞれの出来事に関する

経験頻度(3件法)と不快度(4件法)を掛け 合わせたものをストレス度として算出した。

また、既存の尺度は38項目であるが、回答者の負担を減らすため、本調査では、各下位尺度において因子負荷量の高い上位4項目を選択し、19項目について回答を求めた。

(4) 主観的な遅れ頻度

主想的遅れ頻度尺度(川上,2007)を用いた(5件法)。川上(2007)が、川上・安藤(2001)で作成された遅れ頻度尺度に、授業場面に関する項目を追加した尺度である。この尺度は、「公的遅れ」「私的遅れ」「投業遅れ」の3つの下位尺度から構成されている。

本研究では、授業遅刻に焦点を当てているため、「授業遅れ」のみを使用した。また、高校と大学の授業遅れ頻度を比較するために、大学生活における主観的な遅れ頻度の他に、高校生活での主観的な遅れ頻度(回顧法)も測定した。高校生活での主観的遅れ頻度をきく際に、「一限目」を「一校時」など、同じ意味になるよう意識し、回答者が理解しやすいと思われる言葉に変更した。

(5) 現在の遅刻状況

大学生活での実際の遅刻状況について調査するため、平日の1限目~7限目までの授業の出席状況が記入できるシートを作成し、授業が無い時間を空欄として、時間割通りに出席した授業には「〇」を、遅刻した授業には「×」を記入するよう求めた。「遅刻したコマ数/授業のコマ数」で遅刻率を算出し、角変換した。

(6) 大学生活での授業遅刻の有無と遅刻理由

大学生活での授業遅刻の有無を尋ねた。その後、遅刻をしたことがある者については、遅刻理由について尋ねた。項目は、金子・小森(2005)の授業の遅刻理由7項目であった。

4. 手続き

A大学で講義を開講している教員に、質問紙調査の研究内容の説明と調査依頼を行い、承諾を得た。その後、講義時間中にアンケート調査を実施した。調査用紙を配布する前に、回答は統計的に処理されるため、個人が特定されることはなく研

究目的以外で使用しないことを伝えた。調査時間 は約 15 分であった。

結果

1. セルフ・コントロール方略による調査対象者 の群分け

セルフ・コントロール方略のタイプによる遅刻の様相について分析するために、杉若 (1995)を参考に、RRS の下位尺度であるセルフ・コントロールの方略の種類(改良型:F、調整型:D)とそれらの得点の高低 (H, L) からなる 4 群 (HFHD 群, HFLD 群, LFHD 群, LFLD 群) に分類した。

改良型セルフ・コントロール得点(合計得点)の平均得点は27.13,標準偏差は5.84であった。また,調整型セルフ・コントロール得点(合計得点)の平均得点は17.78,標準偏差は4.46であった(Table.1)。

Table.1 2種類のセルフ・コントロールの平 均値と標準偏差

	平均值	標準偏差
改良型セルフ・コントロール	M=27.13	SD=5.84
調整型セルフ・コントロール	M=17.78	SD=4.46

RRS の改良型セルフ・コントロールと調整型 セルフ・コントロールの両下位尺度得点の平均値 ±1/4SD を基準として、調査対象者を 4 群に分類 した。HFHD 群は改良型セルフ・コントロール が 28.59 点以上かつ調整型セルフ・コントロー ルが 18.89 点以上であり、全体のうち 114 名で あった。HFLD 群は改良型セルフ・コントロール が 28.59 点以上かつ調整型セルフ・コントロー ルが 16.66 点以下であり、全体のうち 42 名で あった。LFHD 群は改良型セルフ・コントロール が25.67 点以下かつ調整型セルフ・コントロー ルが 18.89 点以上であり、全体の 49 名であった。 LFLD 群は改良型セルフ・コントロールが 25.67 点以下かつ調整型セルフ・コントロールが 16.66 点以下であり、全体のうち 78 名であった。セル フ・コントロールの各群の人数と RRS の下位尺 度の平均得点と標準偏差は、以下の通りであった (Table.2)。平均値を M, 標準偏差を SD で示した。

Table.2 各群における RRS の下位尺度の平均得点と標準偏差

	-310 mm C	MY-L-Marr		
	HFHD 群	HFLD 群	LFHD 群	LFLD 群
	(n=114)	(n=42)	(n=49)	(n=78)
	M=32.41	M=31.67	M=21.71	M=20.47
フ・コント ロール	SD=3.23	SD=2.43	SD=3.40	SD=3.71
調整型セル フ・コント	M=21.52	M=13.86	M=21.39	M=12.36
ロール	SD=2.65	SD=2.35	SD=2.25	SD=3.34

2. セルフ・コントロール 4 群における外的要因 のコントロールの差

セルフ・コントロールの4群における外的要因による行動のコントロールの平均得点と標準偏差は、以下の通りであった(Table.3)。

Table.3 各群における外的要因による行動の コントロールの平均値と標準偏差

	平均值	標準偏差
HFHD 群	M=24.99	SD=5.86
HFLD 群	M=23.69	SD=5.68
LFHD 群	M=25.84	SD=6.72
LFLD 群	M=25.42	SD=7.07

セルフ・コントロールの4群 (HFHD 群, HFLD 群, LFHD 群, LFLD 群) における外的要因によるコントロールの差を検討するため、セルフ・コントロールを独立変数、RRS の外的要因によるコントロール因子の合計点を従属変数とし、1 要因 4 水準の分散分析を行った。分析の結果、セルフ・コントロールの4群における外的要因によるコントロールには有意な差はみられなかった (F(3,279)=.98,n.s.)。

3. 学年における現在の遅刻状況の差

学年における<u>現在</u>の遅刻状況の平均と標準偏差は、以下の通りであった(Table.4)。

Table. 4 学年における実際の遅刻状況の平 均と標準偏差

学年	平均值	標準誤差
1 年次	M = 14.56	SD=.65
2 年次	M = 13.69	SD=.88
3 年次	M = 18.45	SD=1.17
4 年次	M = 24.63	SD=1.92

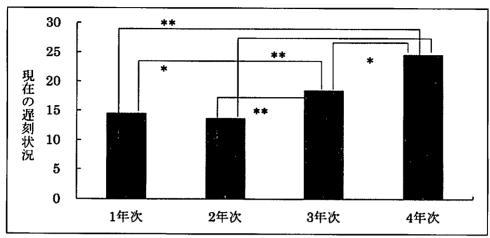


Figure.1 学年における現在の遅刻状況の差 *p<.05 **p<.01

実際の遅刻状況について、学年による差があるかどうかを検討するため、学年(1年次、2年次、3年次、4年次)を独立変数、実際の遅刻状況を従属変数とし、1要因4水準の分散分析を行った。分析の結果、学年における有意な差がみられた(F(3,407)=11.79、p<.01)。多重比較の結果、1年次は3年次よりも5%水準で、4年次よりも1%水準で有意に遅刻が少ないことが示された。また、2年次は3年次と4年次よりも1%水準で有意に遅刻が少ないことが示された(Figure.1)。

4. セルフ・コントロールと学校段階における主 観的な遅れ頻度の差の検討

学校段階(被験者内要因;髙校,大学)とセルフ・コントロールの4群(被験者間要因;HFHD群, HFLD群, LFHD群, LFLD群)を独立変数、授業遅刻の主観的な遅れ頻度を従属変数とした2要因被験者間内混合計画の分散分析を行った。学校段階については、測定を2度行ったというこ

Table.5 各群の学校段階における主観的遅 れ頻度得点の平均点及び標準偏差

	HFHD 群	HFLD 群	LFHD 群	LFLD 群
高校	M=4.33	M=4.98	M=5.35	M=5.10
	SD=.21	SD=.34	SD=.31	SD=.25
大学	M=5.91	M=6.00	M=7.59	M=7.60
	SD=.24	SD = .39	SD=.36	SD=.29

とではないが、同一の調査対象者のデータを扱う ため、被験者内要因とした。

セルフ・コントロールの各群の学校段階における主観的な遅れ頻度の平均点及び標準偏差は以下の通りであった(Table.5)。

分散分析を行った結果, 学校段階の主効果 (F(1,279)=106.06, p<,01), セルフ・コントロー ルの主効果 (F(3,279)=9.21, p<.01) がともに 1%水準で有意であった。さらに、学校段階とセ ルフ・コントロールの交互作用が5%水準で有意 であった (F(3,279)=3.31,p<.05)。そこで、単純 主効果の検定を行った。高校においてはセルフ・ コントロールの単純主効果が5%水準で有意で あり(F(3,279)=3.40, p<.05)、大学においては 1%水準で有意であった (F(3,279)=9.98,p<.01)。 下位検定を行った結果、高校において、HFHD 群は LFHD 群よりも 5%水準で有意に主観的遅れ 頻度が少ないことが示された。さらに、HFHD 群は LFLD 群よりも主観的な遅れ頻度が少ない 傾向がみられた。大学においては、HFHD 群は LFHD 群と LFLD 群よりも、HFLD 群は LFLF 群 よりも、1%水準で有意に主観的遅れ頻度が少な いことが示された。また、HFLD 群は LFHD 群 よりも5%水準で有意に主観的な遅れ頻度が少な いことが示された。さらに、セルフ・コントロー ルの HFHD 群, LFHD 群, LFLD 群において1 %水準で、HFLD 群において 5%水準で、高校は 大学よりも主観的な遅れ頻度が有意に少ないこと が示された。(Figure.2)。

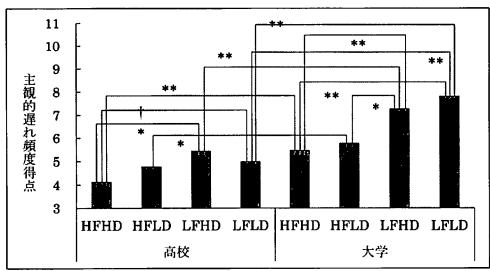


Figure.2 学校段階における各群の主視的な遅れ頻度 † p<.10 *p<.05 **p<.01

5. セルフ・コントロールとストレスにおける主 観的な遅れ頻度の差の検討

セルフ・コントロールの4群とストレスの状態(高群・低群)を独立変数、大学生活での主観的な遅れ頻度を従属変数として被験者間の2要因分散分析を行った。ストレッサー尺度の因子ご

と(家族ストレス、友人ストレス、学業ストレス、充実感の乏しさ、アルバイトストレス)に分析を行った。セルフ・コントロールの4群とストレスの各因子における大学生活での主観的な遅れ頻度の平均値と標準偏差は以下の通りであった(Table.6)。

大学生活での主観的な遅れ頻度の平均値と標準偏差

		HFHD 群	HFLD 群	LFHD 群	LFLD 群
etalda 1 h	低群	M=5.87	M=5.74	M=7.58	M=7.58
		SD=2.67	SD=2.60	SD=2.98	SD=2.21
家族ストレス	7'C#¥	M=6.44	M=7.21	M=7.53	M=7.26
	高群	SD=2.68	SD=2.42	SD=2.36	SD=2.58
	/cC #Y	M=6.03	M=5.14	M=7.24	M=7.33
4-1-1-1	低群	SD=2.75	SD=2.08	SD=2.90	SD=1.88
友人ストレス		M=5.56	M=6.14	M=8.00	M=8.07
	高群	SD=2.24	SD=1.51	SD=2.37	SD=2.79
	/rC # V	M=6.22	M=5.47	M=7.16	M=7.87
Me-48% or L 1 or	低群	SD=2.70	SD=2.53	SD=2.69	SD=2.22
学業ストレス	古傑	M=6.06	M=6.67	M=7.16	M=6.69
	高群	SD=2.67	SD=2.02	SD=2.69	SD=2.22
	低群	M=5.31	M=5.65	M=7.40	M=7.29
かけばのましょ		SD=2.32	SD=2.74	SD=2.66	SD=1.80
充実感の乏しさ	高群	M=6.50	M=6.69	M=8.36	M=7.63
		SD=2.65	SD=2.18	SD=3.23	SD=2.92
アルバイト	低群	M=5.64	M=6.16	M=7.13	M=7.46
		SD=2.64	SD=2.60	SD=2.70	SD=2.44
ストレス	高群	M=6.48	M=5.43	M=7.64	M=7.77
		SD=2.58	SD=1.72	SD=2.61	SD=2.50

①家族ストレス

分析の結果,セルフ・コントロールの主効 果が1%水準で有意であった (F(3,228)=4.02, p<.01)。多重比較の結果,HFHD 群が LFHD 群 と LFLD 群よりも主観的な遅れ頻度が5%水準で 有意に少ないことが示された。家族ストレスの 主効果 (F(1,228)=1.23, n.s.),セルフ・コント ロールと家族ストレスの交互作用 (F(3,228)=.98, n.s.) はともに有意でなかった。

②友人ストレス

分析の結果、セルフ・コントロールの主効果が 1 %水準で有意であった (F(3,229)=10.40, p<.01)。多重比較の結果、HFHD 群が LFHD 群 と LFLD 群よりも、HFLD 群が LFHD 群と LFLD 群よりも、主観的な遅れ頻度が 1%水準で有意に少ないことが示された。友人ストレスの主効果 (F(1,229)=1.92, n.s.)、セルフ・コントロールと友人ストレスの交互作用 (F(3,229)=1.08, n.s.) はともに有意でなかった。

③学業ストレス

分析の結果、セルフ・コントロールの主効果が 1%水準で有意であった (F(3,217)=4.54,p<.01)。多重比較の結果、HFHD 群が LFHD 群と LFLD 群と LFLD 群よりも主観的な遅れ頻度が 1%水準で有意に少なく、HFLD 群が LFHD 群と LFLD 群よりも主観的な遅れ頻度が少ない傾向がみられた。学業ストレスの主効果 (F(1,217)=.09, n.s.)、セルフ・コントロールと学業ストレスの交互作用 (F(3,217)=1.96, n.s.) はともに有意でなかった。

④充実感の乏しさ

分析の結果、セルフ・コントロールの主効果が1%水準で有意であった(F(3,221)=7.60、p<.01)。多重比較の結果、HFHD群がLFHD群とLFLD群よりも主観的な遅れ頻度が1%水準で有意に少なく、HFLD群がLFHD群よりも主観的な遅れ頻度が5%水準で有意に少ないことが示された。また、充実感の乏しさの主効果も有意であった(F(1,221)=5.50、p<.05)。セルフ・コントロールと充実感の乏しさの交互作用(F(3,221)=.37、n.s.)は有意でなかった。

⑤アルバイトストレス

分析の結果,セルフ・コントロールの主効果が1%水準で有意であった (F(3,241)=6.02,p<.01)。多重比較の結果,HFHD 群が LFHD 群よりも5%水準で、LFLD 群よりも1%水準で、主観的な遅れ頻度が有意に少なく、HFLD 群が LFLD 群よりも主観的な遅れ頻度が5%水準で有意に少ないことが示された。また、アルバイトストレスの主効果 (F(1,241)=.32, n.s.)、セルフ・コントロールと充実感の乏しさの交互作用 (F(3,241)=.56, n.s.) はともに有意でなかった。

6. セルフ・コントロールとストレスにおける実際の遅刻状況の差の検討

セルフ・コントロールの4群とストレスの状態(高群・低群)を独立変数、大学生活での実際の遅刻状況を従属変数として被験者間の2要因分散分析を行った。ストレッサー尺度の因子ごと(家族ストレス、友人ストレス、学業ストレス、充実感の乏しさ、アルバイトストレス)に分析を行った。セルフ・コントロールの4群とストレスの各因子における大学生活での主観的な遅れ頻度の平均値と標準偏差は以下の通りであった(Table.7)。

①家族ストレス

分析の結果,セルフ・コントロールの主効果 (F(3,228)=.55, n.s.) も家族ストレスの主効果 (F(1,228)=.05, n.s.) もセルフ・コントロールと 家族ストレスの交互作用 (F(3,228)=1.79, n.s.) も有意な差はみられなかった。

②友人ストレス

分析の結果,セルフ・コントロールの主効果 (F(3,229)=1.54, n.s.) も友人ストレスの主効果 (F(1,229)=1.49, n.s.) もセルフ・コントロールと友人ストレスの交互作用 (F(3,229)=.19, n.s.) も有意な差はみられなかった。

③学業ストレス

分析の結果, セルフ・コントロールと学業ストレスの交互作用は有意であった (F(3,217)=3.40, p<.05)。そこで、単純主効果の検定を行った。

その結果、LFHD 群において学業ストレス低群が 高群よりも実際の遅刻状況が 5%水準で有意に少 なく、LFLD 群において学業ストレス高群が低群 よりも実際の遅刻状況が5%水準で有意に少ないことが示された(Figure.3)。

Table.7 セルフ・コントロールの群とストレス各因子群における 大学生活での実際の遅刻状況の平均値と標準偏差

		HFHD 群	HFLD 群	LFHD 群	LFLD 群
	低胖	M = 14.00	M=13.09	M=15.50	M=17.49
		SD=8.31	SD=7.77	SD=8.68	SD=11.11
家族ストレス	110 1114	M=17.08	M=13.84	M=17.18	M=13.18
ì	高群	SD=13.21	SD=6.62	SD=11.62	SD=6.43
	46 B¥	M=14.33	M=11.64	M=16.39	M=15.51
+1-11	低群	SD=9.52	SD=5.60	SD=10.07	SD=8.72
友人ストレス 🕒	1'0 ##	M=15.57	M=14.19	M=16.60	M=18.42
i	7.84样	SD=9.85	SD=8.27	SD=8.66	SD=12.63
	低群	M=15.41	M=12.99	M=11.41	M=18.27
A14 444 and 1 a and		SD=9.47	SD=6.37	SD=4.82	SD=11.66
学業ストレス	85 <i>8</i> ¥	M=14.99	M=10.73	M=18.66	M=13.37
		SD=10.70	SD=4.34	SD=11.41	SD=7.78
	低群	M=14.01	M=10.05	M=13.24	M=15.93
table of 1 se		SD=8.27	SD=3.09	SD=6.75	SD=9.76
充実感の乏しさ ー	海群	M=16.65	M=15.29	M=21.72	M=16.30
		SD=12.15	SD=7.71	SD=12.04	SD=8.02
	低群	M=13.70	M=12.35	M=14.27	M=17.77
アルバイト		SD=8.29	SD=6.35	SD=8.96	SD=11.39
ストレス	高铁	M=18.67	M=12.82	M=17.57	M=15.57
		SD=13.37	SD=7.08	SD=10.19	SD=8.70

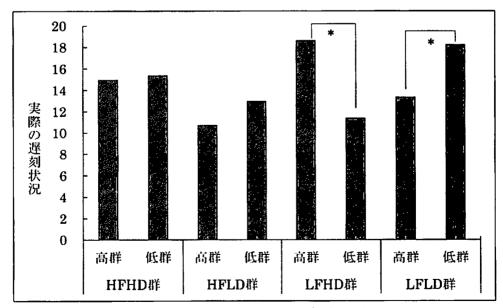


Figure.3 セルフ・コントロールの各群における 学業ストレス群の実際の遅刻状況 *p<.05

④充実感の乏しさ

分析の結果,セルフ・コントロールの主効果 (F(3,221)=1.76, n.s.) は有意でなかった。充 実感の乏しさの主効果 (F(1,221)=9.92, p. < 01) が有意であり、充実感の乏しさ低群が高群よりも 1%水準で有意に実際の遅刻状況が少なかった。セルフ・コントロールと充実感の乏しさの交互作用(F(3,221)=1.62, n.s.)は有意でなかった。

⑤アルバイトストレス

分析の結果,セルフ・コントロールの主効果 (F(3,241)=1.09, n.s.) もアルバイトストレスの主効果 (F(1,241)=1.15, n.s.) もセルフ・コントロールとアルバイトストレスの交互作用 (F(3,241)=1.77, n.s.) も有意な差はみられなかった。

考察

1. セルフ・コントロール 4 群における外的要因 によるコントロールの差

セルフ・コントロールの4群において、外的 要因のコントロールには有意な差がみられなかっ た。このことは、杉若(1995)の先行研究を支 持する結果となった。

2. 出身県における実際の遅刻状況の差

出身が沖縄県の人とその他の県の人との間に有意な差はみられず、出身県では授業遅刻状況に違いがないことが示された。沖縄県は、「うちなータイム」という言葉が使われるように、時間にルーズな県であるとされている。しかし、この結果から、大学生の授業遅刻に関しては、沖縄県出身の人が特に遅刻をしているということはないことが明らかとなった。

3. セルフ・コントロールと学校段階における主 観的遅れ頻度の差

分散分析を行った結果、交互作用がみられたため、セルフ・コントロールと学校段階は相互に関連して主観的遅れ頻度に影響している事が示された。高校においては、HFHD群は LFHD群よ

り有意に主観的遅れ頻度が少なく、HFHD 群は LFLD 群よりも主観的な遅れ頻度が少ない傾向が みられた。大学においては、HFHD 群は LFHD 群と LFLD 群よりも、HFLD 群は LFLF 群よりも、 有意に主観的遅れ頻度が少ないことが示された。 さらに、セルフ・コントロールの全ての群におい て、高校は大学よりも主観的な遅れ頻度が有意に 少ないことが示された。これらの結果から、高校 でも大学でもセルフ・コントロールの違いによっ て遅刻頻度に差があること、しかしながら、セル フ・コントロールの全ての群が、高校において、 大学よりも遅刻が少なくなっていたことが明らか となった。さらに、大学 1、2 年生よりも 3、4 年生の方が遅刻が多いという結果が示された。

このことから、セルフ・コントロールの4群 は同程度に外的要因によるコントロールを活用し ているため、高校においては外的要因によるコン トロールの多い環境であるため大学よりも遅刻が 少なかったと考えられる。さらに、外的要因によ るコントロールが多い環境である(たとえば、遅 刻指導がある,毎朝登校時間が同じであるため親 に起こされるなど)と考えられる高校生のときに はセルフ・コントロールの個人差に関係なくどの 群も遅刻頻度は少ないが、外的要因によるコント ロールが少ない環境であると考えられる大学生で は、セルフ・コントロールによるコントロールの 差が個人の行動のコントロールの差としてより顕 著に出てくるために、計画をたてて望ましい行動 に変えていこうとする改良型セルフ・コントロー ル (Rosenbaum, 1989) が高いという特徴を持 つ HFHD 群と HFLD 群は遅刻頻度が少なかった のであろう。しかし、HFLD 群は、ストレス反応 を低減することなく満足遅延行動を維持すること (杉若, 1995)、また、それに加え、遅刻をしな い動機づけがダメージによる不安と考えられるた め遅刻をしないと考えられる。このことは、学校 生活に適応しているようにみえるが、毎日、評価 や罰を気にしながら行動していることから、本人 には辛い状態であると推測できる。そうだとすれ ば、HFLD 群は、基本的に遅刻はしないが、長期 的に本人にとって辛い状態が続くことも考えられ るため、今後欠席との関係もみる必要性があるだ ろう。HFLD 群については、そのような危惧もあ

るが、遅刻頻度は、改良型コントロールの高さで 違いが出ると捉えられることから、遅刻をしない ようにするためには、杉若(1995)の HFHD 群 の特徴にあるように、目標をたて、それに対する 下位の目標を設定して行動を実行していくことが 必要であると考えられる。今回の調査で回答を求 めた遅刻理由についても、その中でも特に「寝坊」 や「時間の逆算が甘い」という理由が多くみられ たので、現実的に実行可能な時間で、しっかりと 時間単位で計画して行動すると遅刻という行動の 変化が生じると推察される。

4. セルフ・コントロールとストレスにおける遅刻 (主観的な遅れ頻度, 現在の遅刻状況) の差

「充実感の乏しさ」因子については、主観的な 遅れ頻度も、実際の遅刻状況も、「充実感の乏しさ」 の主効果が有意であり、低群が高群よりも遅刻が 少ないことが示された。このことから、大学生活 に充実した意義を見出すことができている人は遅 刻が少ないことが考えられる。このことから、遅 刻には、セルフ・コントロールだけでなく、大学 生活へのモチベーションも関わっていると考えら れる。

「学業ストレス」因子については、主観的な遅 れ頻度には、「学業ストレス」の主効果は有意で はなかったが、実際の遅刻状況については、セル フ・コントロールと「学業ストレスの」交互作用 が有意であり、LFHD 群において、「学業ストレス」 低群が高群よりも有意に遅刻が少なく、LFLD 群 においては、高群が低群よりも有意に遅刻が少な いことが示された。LFLD 群で「学業ストレス」 高群が低群よりも遅刻が少なかったことには、改 良型セルフ・コントロールの活性化が関係してい ると考えられる。改良型セルフ・コントロールは、 厳しい状況下であり、かつ行動の結果が予測でき る場合に活性化するとされている(杉若,2005)。 学業ストレスを感じている状況は、時間に課題や 試験勉強で忙しい等というような厳しい状況下で あり、通常の状態よりも、授業にしっかり出席し なければ課題や試験勉強に必要なことを学ぶこと が出来ずに単位を落としてしまうかもしれないと いうような結果が予測される。そのため、改良型 セルフ・コントロールが活性化して授業に時間通 りに行こうという行動が促進され、「学業ストレス」が高群の人のほうが低群よりも遅刻が少ないと考えられる。LFHD 群は、調整型セルフ・コントロールの用い方が特定場面のストレス対処に限られ、改良型セルフ・コントロールを補助する形で用いられることは少ない(杉若、1995)とされている。つまり、LFHD 群は LFLD 群よりも、ストレス場面において発生する情動的・認知的反応の制御である調整型コントロール(Rosenbaum、1989)が高いため、「学業ストレス」が高い状態のときに、ストレスを感じる学業そのものに向きらのではなく、好きなことをして気分を改善してから授業に向かおうとし、結果的に遅刻してしまうということが考えられる。

引用文献

- 藤田正 2005 先延ばし行動と失敗行動の関連につい て 奈良教育大学教育実践総合センター研究紀要 14 43-46
- 藤田正 2012 学習課題先延ばし行動に及ぼす自己調整 要因の検討 奈良教育大学紀要 61 43-51
- Jessor,R. 1998 New perspectives on adolescent risk behavior. In Jessor,R. (Ed.) New Prespectives on Adolescent Risk Behavior. NewYork: Cambridge University Press. 1-10.
- 金子智栄子 小韓由紀子 2005 女子大学生の遅刻に関する研究一遅刻者の状況と意識,並びに性格的特徴と学校適応感について一文教学院大学研究紀要 7 193-202
- 川上正浩 2007 遅れに対する態度と実際の遅れ生起と の関連大阪樟路女子大学人間科学研究紀要 6 75-83
- 小浜駿 2010 先延ばし過程で自覚される認知および 感情の変化の検討 心理学研究 81(4) 339-347
- Lazarus RS,Folkman S. 1984 Stress,appraisal,andco ping.NewYork:Springer
- 命婦ら 2012 長期欠席の前兆としての遅刻についての 縦断研究ー中学校 3 年間の調査―心理学研究
- 野添・古賀 1990 登校拒否・不登校の原因をさぐる 坂野雄二 (編) メンタルヘルス・シリーズ登校拒 否・不登校 同朋舎
- Rosenbaum, M. 1989 Self-control under stress: The role of learned resourcefulness.
- 杉若弘子 1995 日常的なセルフ・コントロールの個人差評価に関する研究 心理学研究 66(3) 169-175
- 杉若弘子 2005 改良型セルフ・コントロールを活性 化する要因 奈良教育大学紀要 54(1)63-67
- Solomon, L. J. &Rothblum, E. D. 1984 academic procrastination:
 - Frequency and cognitive-behavioral correlates. Journal of
 - Counseling Psychology, 31, 503-509.
- 鈴木伸一 2004 ストレスマネジメント実践マニュアル 北大路背房
- Thoresen,C.E. & Mahoney,M.J. 1974 Behavioral self-control.New York: Holt,Rinehart, & Winston (上里一郎監訳 1978 セルフ・コントロール 福村出版)
- 上田敏見 伊谷実 杉村健 1983 中学生における遅刻の研究 奈良教育大学教育研究所紀要 19 97 -104

謝辞

本論文作成に際して、快く調査に協力して頂きました研究協力者の皆様にこの場をお借りしてお礼申し上 げます。